

## 令和2年度

### 「JA 青年組織手づくり看板全国コンクール」

### 「JA 全青協オリジナルワークウェアポスターコンクール」

## 審査講評

全国農協青年組織協議会主催の令和2年度「JA 青年組織手づくり看板全国コンクール」には、全国の27都道府県から65作品（看板部門54点、アート部門11点）、「JA 全青協オリジナルワークウェアポスターコンクール」へは8県から16作品の応募をいただきました。

審査委員会は令和3年1月18日（月）に東京・大手町のJAビルで開催され、審査委員は、全国消費者団体連絡会、JA全農、JA共済連、農林中央金庫、日本農業新聞、家の光協会、農協観光、JA全中の各団体から8名の広報担当職員にお集まりいただき、審査委員長に全国の青年部活動を取り上げている雑誌『地上』の編集長の魚谷昌宏氏が互選されました。

#### 【審査委員】（敬称略）

魚谷 昌宏＜審査委員長＞（家の光協会 編集本部地上編集部 編集長）

廣田 浩子（全国消費者団体連絡会 政策スタッフ）

沢登 幸徳（全国農業協同組合連合会 広報・調査部 次長）

上野 温司（全国共済農業協同組合連合会 調査広報部 部長）

岡元 純児（農林中央金庫 総務部 広報企画担当部長）

行田 元（株式会社 日本農業新聞 広報局長）

鈴木 哲郎（株式会社 農協観光 総務部 課長）

元広 菜穂子（全国農業協同組合中央会 広報部 部長）

## I. JA 青年組織手づくり看板全国コンクール 講評

作品募集テーマは「農業のある地域づくりの大切さに関する地域住民へのアピール」です。インパクト（設置場所選択を含む）、内容、デザインなどの審査基準に基づき審査を行いました。

### 1. 最優秀賞 「鹿児島県 JA あいら青年部」

地元で生産される農畜作物をチョークでバランスよく描くことにより、デザインとして完成されている点や、黒板上の配色と背景となるレンガ壁を合わせた全体の構成力で、思わず目を引く視認性が高く評価をされました。インパクトに優れた作品が多かった中、本作品が最優秀賞に選ばれました。

### 2. アート部門賞 「石川県 JA 白山青壮年部 林支部」

稲わらで作られたアマビエが、世相を反映していることや、そのおっかないような、面白いような表情にインパクトがあった点が評価されました。設置場所がJAの直売所であり、多くの消費者が目にするほか、生産者が作成

したと分かりやすいことも高く評価されました。

### 3. 特別賞

#### ○ 全国消費者団体連絡会賞 「東京都 JA 東京むさし本部青壮年部」

コロナ禍においても東京農業の「そばにある」という都市農業の特徴が表現されており、また描かれている人物が、農産物を介した人と人との繋がりにより、表情豊かに表現されているという点が作品として高く評価されました。

#### ○ JA 全農賞 「富山県 福光農協青年部 広瀬支部」

地域の伝統文化である太鼓を看板の中心に据え、地域の特色を示しているほか、太鼓の周りには、農業を中心に生き生きとした生態系や表情豊かな人物が描かれており、そのメッセージ性の深さが高く評価されました。

#### ○ JA 共済連賞 「新潟県 佐渡農協青年部 新穂支部」

コロナ禍でマスクをしなければならない中、食事の時だけマスクを外すことができるというメッセージには深く考えさせられました。左下には、佐渡の地図も描かれており、地元の食材を食べてほしいという気持ちが伝わってくるデザインも合わせて高く評価されました。

#### ○ 農林中央金庫賞 「長崎県 壱岐市農業協同組合青年部 那賀支部」

非常にシンプルな構図ではあるものの、子供が嬉しそうにおにぎりを頬張っているシーンが、つよいカラダが作れるというメッセージに直結しており、その分かりやすさとインパクト力が高い評価を得ました。

#### ○ 日本農業新聞賞 「岩手県 江刺農業協同組合青年部 玉里・米里支部」

たくさんの種類の農畜産物が生産されている江刺の農業を表現するとともに、これら地元産品をおいしく食べることによる「免疫力 UP↑」という分かりやすい構図ありながら、的確に時代を捉えた強いメッセージを発信できているとして高く評価されました。

#### ○ 地上賞 「秋田県 かつの農業協同組合青年部 花輪支部」

テーマである「農業のある地域づくりの大切さ」を絵全体でアピールできしており、またキャッチフレーズをドローンで飛ばす構図が「夢」と非常にマッチしていたこと、さらに、設置場所が国道沿いで多くの人に目が触れる場所にあるということが高く評価されました。

#### ○ 農協観光賞 「佐賀県 JA さが中部地区青年部 金立支部」

登場している野菜たちが歯を出すほどの笑顔で笑っており、年齢に関係なく見ただけで元気をもらえ、思わず微笑んでしまう構図である一方、農協や農村風景を描くなど細部についても意識をされているということが高く評価されました。

#### ○ JA 全中賞 「佐賀県 JA 伊万里大川支所青年部」

優しいタッチで柔らかな表情の生産者を描きながらも、赤をバックにしたメッセージがしっかりと強調されており、生産者の意気込みが地域に伝わる

作品として高く評価されました。

## 【総評】

本年度は、新型コロナウイルスが猛威を振るった1年になりました。新型コロナウイルスの感染拡大により、JA 青年組織の活動を通常通り行うことがとても難しかった1年ではなかったかと思っております。そんな中でも、例年と変わらない数の作品が応募され、活動の継続にかける JA 青年組織の組織力や想いを強く感じる審査会になりました。

作品全体を見ると「地域づくりの大切さ」をテーマに、一枚の看板にどれだけの目を釘付けにすることができるか、その上で、わかりやすくメッセージを伝えることができるかということが良く考えられた、JA 青年組織盟友の熱意が伝わる力作ぞろいだと思います。

社会全体の雰囲気が暗い中で、非常に深いメッセージが込められたものや、そうした鬱々とした雰囲気を取り払うかのような、見た目にインパクトがあり、思わず笑顔になってしまう作品も多く、選考に苦勞するコンクールとなりました。

アート部門についても、立体感を出せることもあり固定観念にとらわれることなく、創意工夫あふれる斬新な作品が多く寄せられました。農業が持つ自由さや多様性といった魅力を存分に表現しながら、独創性を持った地域とのつながりを大切にする作品作りに今後ともチャレンジしていただければと思います。

審査では、看板部門・アート部門にかかわらず、テーマである「農業のある地域づくり」を実現するために、地域住民に「どうメッセージを伝えているか」という点を最大の評価ポイントとしています。

デザインのインパクトや見やすさ、地域性といった作品単体の出来栄だけでなく、設置場所が効果的かも是非考慮していただければと思います。

看板製作をきっかけに、地域住民の食と農に対する理解が深まり、それぞれの地域で、住民と一体となった取り組みがなされることを期待しています。また、盟友と協力して看板制作に取り組むことで、盟友同士の絆が深まり、各地の JA 青年組織の活動がさらに活発化していくことを期待しております。

今後も本コンクールの開催が各地盟友の看板制作の励みになること、そして JA 青年組織の看板・アート作品が全国に広がり、日本農業・地域社会の情報発信源となることを確信しております。

## Ⅱ. JA 全青協オリジナルワークウェアポスターコンクール 講評

作品募集テーマは「農業の魅力を『カッコ良さ』で表現し、国民へアピールする」です。地域の消費者、子供などに対して農業への理解を促進する観点から審査を行いました。

### 1. 最優秀賞 「北海道 北海道農協青年部協議会」

この作品は、テーマの『カッコ良さ』が何よりも表現された作品であり、「ジュノンボーイ」を意識した「純農ボーイ」と洒落も利かせている反面、その後のメッセージには熱い想いが込められている点が高く評価され、最優秀賞に相応しい作品として支持されました。

### 2. 優秀賞 「栃木県 JA 栃木青年部連盟」

この作品は、コメ余りという厳しい状況に対し、「やっぱり米」というシンプルなキャッチフレーズで分かりやすくアピールしている点と、盟友が「海苔」に見立てられている構図が面白いと高く評価されました。

### 【総評】

今年は、コロナという社会的状況にも関わらず、応募作品が昨年度の4作品から16作品と大幅に増加しました。これは、活動の継続にけるJA青年組織の想いを感じる審査でした。

「ポスター」というのは、「偶然」との出会いだと思っております。歩いているとき、「偶然」目に留まり、足を止める。その対象は、子どもからお年寄りにかけてまで限定されません。この「偶然」を生み出すことができる作品がいい作品であると思っております。

今年度応募された作品はどれも完成度が高く、未来を見据えて農業と向き合い、消費者の食を支えていく気持ち、また農の楽しさが伝わってくる内容のもので、どれも「偶然」を生み出せる作品だと思いました。

視覚に訴えるポスターというのは、対象を絞ることなく農をPRにするにあたって非常に重要です。JA全青協のポスターコンクールは今回をもって終了となりますが、ポスターによる情報発信は手軽に取り組むことができます。ぜひ皆さんの組織でもポスター作りに取り組んでみてください。

以上